

主 題：パウロの誇り

聖書箇所：ローマ人への手紙 15章14-29節

パウロがローマ教会に送ったこの手紙もいよいよ終わり近くなり、私たちはその部分を学ぶこととなりますが、パウロはこれまで、救いに関する重要な教理を教え、そして、その救いに与った者としてどのように日々を過ごして行くのか、どのように日々を生きるのかについて彼は教えを与えてくれました。救われた者として、罪赦された者として今日をどのように生きて行くのか、その大切な歩みについてパウロは私たちに教えてくれました。

そして、今日から見ていく15章14節から、ここに来てパウロは自分自身に関することへと話を移行しています。彼がこの手紙を記したその主旨を、また、1章の初め、特に1章8節から彼が記したその内容をより詳細に説明してくれています。15章14節から見て行くと、大きくこのように分けることができます。一つは、パウロの召命が記されています。パウロが神によって救われ、そして、このすばらしい務めに遣わされたこと、その務めを果たしているパウロの姿が14節から21節に記されています。また、22節から29節を見ると、そこにはパウロ自身の宣教の計画が記されています。彼はイエス・キリストの福音を宣べ伝え続けて行きたいと、そのような願いを持ち宣教の計画を立てていました。そして、最後の30節から33節にはパウロの祈禱課題が記されています。兄弟姉妹たちに対してこのようなことを祈って欲しいと彼の祈りが上げられています。

まず、私たちは14節から「パウロの召命」についてごいっしょにみことばを見ていきたいと思いません。

A. パウロの召命 14-21節

パウロはこの中で、どうしてこの手紙を記したのか、どうしてこの手紙をローマの兄弟姉妹たちに送ったのか、その理由を説明しています。彼が言いたかったことは「私が使徒だから、使徒として召された者だからこの手紙をあなたたちに送った」とそのように語るのです。彼がローマの兄弟姉妹に送ったこの手紙の最後の内容を見て行く前に、まず、パウロ自身の召命について皆さんに是非思い出していただきたいと思いません。

◎パウロの召命

旧約の教えに精通していたパウロ、彼はこんなことを信じていました。神の教えを守るといいう行ないによって罪の赦しを得ることができると。そのように信じ、そして、律法の教えを厳格に守ろうとして来ました。また彼は、主イエスは神であり、約束の救世主であると信じないだけでなく、そのことを信じているクリスチャンを迫害することが神に喜ばれることだと信じて、実際に迫害を行なっていました。彼はもっと多くのクリスチャンを迫害する目的でダマスコに向かっていたのですが、その途中で彼は主イエス・キリストに出会ったのです。そして、主の恵みによって罪の赦しをいただきました。その当時の様子をパウロは自分の証の中で語っていますが、その様子をルカが具体的に記しています。皆さんが良くご存じの箇所です。使徒の働き9章に、ダマスコに向かっていたパウロに主イエス・キリストが現われて、彼を救いへと導いていった様子が記されています。使徒9：1-7「さてサウロは、なおも主の弟子たちに対する脅かしと殺害の意に燃えて、大祭司のところに行き、：2 ダマスコの諸会堂あての手紙を書いてくれるよう頼んだ。それは、この道の者であれば男でも女でも、見つけ次第縛り上げてエルサレムに引いて来るためであった。：3ところが、道を進んで行って、ダマスコの近くまで来たとき、突然、天からの光が彼を巡り照らした。：4彼は地に倒れて、「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。」という声を聞いた。：5彼が、「主よ。あなたはどなたですか。」と言うと、お答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。：6立ち上がって、町にはいりなさい。そうすれば、あなたのしなければならぬことが告げられるはずで。：7同行していた人たちは、声は聞こえても、だれも見えないので、ものも言えずに立っていた。」、そして、パウロは手を引いてもらってダマスコへと入って行きました。三日間彼は目が見えず、また、飲み食いもしなかったとみことばが教えます。そのダマスコにアナニヤというイエス・キリストの弟子がいました。このアナニヤに主がお語りになったのです。10-22節「：10さて、ダマスコにアナニヤという弟子がいた。主が彼に幻の中で、「アナニヤよ。」と言われたので、「主よ。ここにおります。」と答えました。：11すると主はこう言われた。「立って、『まっすぐ』という街路に行き、サウロというタルソ人をユダの家に尋ねなさい。そこで、彼は祈っています。：12彼は、アナニヤという者がはいて来て、自分の上に手を置くと、目が再び見えるようになるのを、幻で見たのです。」：13しかし、アナニヤはこう答えた。「主よ。私は多くの人々から、この人がエルサレムで、あなたの聖徒たちにどんなにひどいことをしたかを聞きました。：14

彼はここでも、あなたの御名を呼ぶ者たちをみな捕縛する権限を、祭司長たちから授けられているのです。」：15
 しかし、主はこう言われた。「行きなさい。あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に
 運ぶ、わたしの選びの器です。：16 彼がわたしの名のために、どんなに苦しまなければならないかを、わたしは
 彼に示すつもりです。」：17 そこでアナニヤは出かけて行って、その家にはいり、サウロの上に手を置いてこう
 言った。「兄弟サウロ。あなたが来る途中でお現われになった主イエスが、私を遣わされました。あなたが再び
 見えるようになり、聖霊に満たされるためです。」：18 するとただちに、サウロの目からうろこのような物が落
 ちて、目が見えるようになった。彼は立ち上がって、バプテスマを受け、：19 食事をして元気づいた。サウロは
 数日の間、ダマスコの弟子たちとともにいた。：20 そしてただちに、諸会堂で、イエスは神の子であると宣べ伝
 え始めた。：21 これを聞いた人々はみな、驚いてこう言った。「この人はエルサレムで、この御名を呼ぶ者たち
 を滅ぼした者ではありませんか。ここへやって来たのも、彼らを縛って、祭司長たちのところへ引いて行くため
 ではないのですか。」：22 しかしサウロはますます力を増し、イエスがキリストであることを証明して、ダマス
 コに住むユダヤ人たちをうろたえさせた。」、サウロの目が開かれたことが明らかに記されています。クリ
 スチャンを迫害するためにこの町にやって来ようとしていたサウロが、主イエス・キリストを宣べ伝える
 者へと変えられた、このようなことが起こったとみことばは私たちに教えます。

◎パウロは、

1) 救いを感謝していた / 誇っていた

彼は間違いなく神が彼に与えてくださったすばらしい救いをだれよりも感謝している人物でした。神
 から賜った救いをだれよりも誇りとしていたことが彼の証の中に記されています。I コリント 15 : 9
 - 10 「私は使徒の中では最も小さい者であって、使徒と呼ばれる価値のない者です。なぜなら、私は神の教会
 を迫害したからです。：10 ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神
 の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。しかし、それは私ではなく、
 私にある神の恵みです。」と、パウロは自分のことをよく知っていました。自分はどれ程神の前に正しい
 かと思っていたが、実はそうでなく、いかに罪に汚れた者であったか、神が愛する神の子どもたち、ク
 リスチャンたちを迫害するというそのような大きな罪を犯した。だから、自分のような者が神のあわれ
 みに与ることなど不可能だと知っていたパウロです。そのような自分を救ってくださったと、そのこと
 を知った時に彼はこの主を大いに喜び、この救いを大いに感謝しました。

同じことをパウロはI テモテ 1 : 13 - 17 に記しています。「私は以前は、神をけがす者、迫害する者、
 暴力をふるう者でした。それでも、信じていないときに知らないうちに、あわれみを受けたのです。
 :14 私たちの主の、この恵みは、キリスト・イエスにある信仰と愛とともに、ますます満ちあふれるようになり
 ました。：15 「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」ということばは、まことであり、
 そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。：16 しかし、そのような私があわれみを受
 けたのは、イエス・キリストが、今後彼を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の見本にしようと、まず
 私に対してこの上ない寛容を示してくださったからです。：17 どうか、世々の王、すなわち、滅びることなく、
 目に見えない唯一の神に、誉れと栄えとが世々限りなくありますように。アーメン。」、パウロはこのよう
 に証をしています。パウロは自分のことをよく知っており、そして、このような者に注がれた神の救いの
 恵みをだれよりも感謝したのです。

2) 務めを感謝していた / 誇っていた

だからこそ、神からすばらしい務めをいただいた時に、彼は喜んでそれを受け入れ、それを誇りなが
 らその務めを果たそうと生きたのです。彼は神からいただいた務めを感謝し、それを誇っていました。
 I テモテ 1 : 12 には「私は、私を強くしてくださる私たちの主キリスト・イエスに感謝をささげています。な
 げなら、キリストは、私をこの務めに任命して、私を忠実な者と認めてくださったからです」とあります。「私
 は感謝している。なぜなら、神が私にこのすばらしい務めをくださったから」と言います。それがいの
 ちがけであったことをパウロは自分のことばでこのように言っています。使徒 20 : 24 「けれども、
 私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終える
 ことができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。」と。彼はだれよりも与えられた救いを感謝
 している者でした。その感謝があったから、彼は喜んでこの神に答えて行こうとしたのです。まさに、
 これは私たちが今まで学んで来たことではないですか？

信仰者の皆さん、もしかすると、そこがこのパウロとあなたの違うところかも知れません。どうです
 か？皆さん。神の一方的な恵みによって与えられたこの救いという恵みを感謝しておられますか？何も
 のよりも「神さま、こんな罪人の私をあなたは一方的に愛してこのような救いをくださった。感謝しま
 す。本当に神さま、ありがとうございます！」と。そのような感謝をもって私たちは一日一日を過ごし
 ているかどうかです。もし、私たちがそのように感謝しているなら、どのようにこの感謝を具体的な形
 をもって現わして行こうかと考えるはずではないですか？主が「こういうことをしなさい」と言われた

なら、感謝している者なら「喜んでやります」と言います。「それがあなたが望んでいらっしゃることならば、それによってあなたが喜んでくださることならば、私は喜んでやります。」と。だから、パウロはこのようにいのちがけで生きたのです。このように徹底して主のみこころに従おうとしたのです。私たちはパウロの生き様を見た時に「パウロだから、彼が特別だったから…」と言うかも知れません。でも、私たちが彼に質問するならば、彼はきっと「私が特別なのではない。私のような者を救ってくださった主が特別なのです。」と言うでしょう。そして感謝なことに、救ってくださっただけでなく、こんなに失敗を繰り返す私をこうして赦して、必要な恵みを与えて、神のご用に用いてくださる神だけがすばらしいのです。「アーメン」と言いませんか、皆さん？その通りですね。そのようにして私たちも生きていくはず。そうして私たちも生きていくはず。主から何か務めが与えられるがそれは重荷とはならないのです。それは私たちにとって喜びなのです。

もちろん、パウロはこうして宣教師として神によって大いに用いられました。牧会的な配慮をしながら彼はすばらしい働きをしました。ここにいらっしゃる皆さんが同じ働きに召されているとは思いません。でも皆さん、神は同じようにあなたをあわれみ、あなたを罪から救い出してくださった、そして、その神はあなたを様々なところに置いてくれたのです。家庭に置いてくださっています。職場に置いてくれています。学校に置いてくれています。その地域に、親族の中にあなたを置いてくださった。それは私たちが同じ働きをするためにです。

パウロが言ったように、この救いのメッセージ、救いの恵みの福音のメッセージを証する任務を果たし終えることができるなら…と、この務めに与っているのは私たちみなです。あなたがどんな働きに召されているかは大切なことではないのです。大切なことは、私たちこの主の恵みによって救われた一人ひとりには、すばらしい救いのメッセージを語るという、この恵みの福音のメッセージを語るという、大切な務めをいただいているということです。そして、パウロはその働きをいのちがけで行なったのです。主に対して感謝していたからです。あなたはいかがですか？パウロはだれよりも救われたことを感謝し、それゆえに喜んで主に仕えようと思いました。神からの召しをいただいた時に、その召しに喜んで従って行こうとした。その背後にはこの救いへの感謝があったのです。そして、私たちにもそのことが必要なのです。救われたことを感謝する信仰者として今日生きることです。なぜなら、その時に「主よ、何をしましょうか？」と、そのようにいつも主に問いかけながら、主に喜ばれることを選択する信仰者へと行って行くからです。

1. ローマ教会についての三つの特徴 14節

さて、主の召命をいただいたパウロはその召命に従ってこの手紙を記したと言います。14節に「私の兄弟たちよ。あなたがた自身が善意にあふれ、すべての知恵に満たされ、また互いに訓戒し合うことができることを、この私は確信しています。」とあります。パウロはここに、ローマ教会に対する三つの特徴を述べています。

1) 善意にあふれている

「善意」とは「道徳的に高潔である、聖い」という意味を持っています。また、親切である、優しさ、寛容という意味ももったことばです。ジョン・マレーという神学者はこのことばについてこのような説明をしています。「心と生活との正しさ、情け深さ、また、慈悲深さ」と。どのような人たちが集まっている教会だったのか、描けますか？このローマ教会のクリスチャンたちは、パウロのことばを借りるなら、神の前に正しく生きていきたいとそのことを願っていた者たちです。彼らは神の前に聖いことを選択し、そのようなことを行なっていこうとしていました。だからと言って人々をさばっていたのではありません。彼らのうちには人々に対する情け深さ、慈悲深さがありました。そこには優しさがあったのです。そこには寛容さがあったのです。なぜ、このような信仰者、このような教会であることをパウロが知っていたのでしょうか？そのヒントは、実は、このみことばの中にもあるのですが、それをこれから見て行きます。

エペソ5：8でパウロはこのように言っています。「あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。」と、この後でパウロはこのようなみことばを加えています。9節「——光の結ぶ実は、あらゆる善意と正義と真実なのです。——」と、ここに今私たちが見ている「善意」ということばが出ています。「光の結ぶ実は、あらゆる善意と…」とパウロはローマ教会のことを考える時に、この教会の人々は「善意にあふれている」と言うのです。言い方を変えると、この人たちは神の前を正しく生きていたということです。彼らが救われたということを彼らは正しい行ないをもって示していたのです。彼らは悪を憎み、主なる神の前を正しく生きていたのです。主なる神が喜ばれることを行ない続けていたのです。そのような歩みを為すときに、その人のうちに何が起こる

でしょう？神がその人を変えて行きます。その人が神のみことばに従って行こうとするなら、神の前に喜ばれることを実践して行こうとするならば、神がその人を変えていかれます。なぜなら、内住する聖霊なる神は、その人をそのように歩むようにと駆り立てていくからです。

ですから、私たちも同じように歩いて行くなれば、主は私たちをみこころに沿った者として、主が喜んでくださる者として、もっと言えば、イエス・キリストに似た者として変えていってくださるのです。ガラテヤ人への手紙5章の中に「御霊の実」が記されています。「御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、…」(5:22)です。お分かりになったでしょう。この「善意」は聖霊なる神がもたらすものです。ローマ教会のクリスチャンたちは神の恵みによって救いに与ったのです。そして、彼らがみことばに従って生きていく時に、神は約束されたように彼らを変えていかれるのです。このような彼らに当然の特徴として顕著に現われていくのが「善意」です。神の恵みによって救われた者たちは、神が喜ばれることを考え、それを選択し、そのように生きていこうとします。そのような変化を神がその人たちの内にもたらされるのです。それによって彼らが救われていることが明らかになっていくのです。聖霊なる神の働きだと言います。この「善意」は聖霊なる神がもたらすものなのです。ですから、このようなものに特徴づけられる人たちは、言い方を変えると「霊的に成長した人たち」です。神とともに生きている人たちです。「善意」はそのような人の特徴なのです。

2) すべての知恵に満たされている

この「知恵」ということばは、実は、新約聖書の中に28回出て来ます。ところが、面白いことに、日本語で「知恵」と訳されているのはここだけなのです。それ以外のほとんどの箇所では「知識」と訳しています。ここで使われている「知恵」と訳されていることばはどういう意味なのでしょう？これは「神の真理に関する知識のこと」です。パウロが言っていることは、このローマ教会の人たちは、神のみことばを通して神の教えを正しく、しかも深く理解していたということです。そのような知識を持っていたのです。私たちも信仰者として生きていく時に、そのような正しい知識をしっかりと持つことが必要です。何を信じているのか、なぜ、信じているのか、なぜ、私たちはこのように信じているのか、そのような根っこがなければ私たちの信仰はぐらつきます。このローマ教会の人たちを見た時に、パウロは彼らはしっかりと真理に根を下ろしたクリスチャンであると確信しています。

では、なぜ、パウロはここで他と同じようにこのギリシャ語を「知識」ということばに訳さなかったのでしょうか？いや、日本語の訳者がこの「知識」と訳していいことばをどうして「知恵」と訳したのでしょうか？それは、このローマのクリスチャンたちがそのような真理に関する知識をたくさん豊かに蓄えていただけではなかったからです。だから、「知識」とせずに「知恵」としたのです。

ある神学者はこう言います。「このことばはあらゆる種類の実用的洞察力である。」と。つまり、どれだけ的事を知っているか、聖書クイズに出て満点を取るといようなことではありません。それ以上のことです。つまり、このローマのクリスチャンたちはこのみことばという真理にしっかり立っていたゆえに、彼らはそのみことばをもって何が正しいのかを判断することができたし、そして、自ら進んでその神の前に正しいことを選択してそのように生きていたのです。だから、知恵がある人々なのです。そこで訳者はこのことばを「知識」とせずに「知恵」と訳したのです。つまり、ここで言っていることは、どれだけ知っているかではなく、どのように生きているかということです。パウロはコロサイ人への手紙2章3節で「このキリストのうちに、知恵と知識との宝がすべて隠されているのです。」と記しています。つまり、キリストを知ることによって、私たちは私たちに必要な知恵を得ることができるということです。別の言い方をすると、キリストを知れば知るほど、私たちは神に喜ばれるためにはどのように生きていったらいいのかわかることになるということです。どのようにしてキリストを知りますか？神がくださった聖書のみことばを通してです。みことばを通して私たちは真理を知り、そして、その真理を知ることによってどのように生きていったらいいのかわかることを私たちは学ぶのです。

パウロはこのローマの教会員のことをよく知っていました。驚くべきことは、彼はまだこの教会を訪問したことがないのです。訪問したことがないのに、このようなことを彼は知っていました。

- ・ローマのクリスチャンたちはみことばの教えに従い、主に喜ばれる者として成長していた。
- ・ローマのクリスチャンたちはみことばを正しく理解し、その知識が日々の生活において、何が主の前に正しく喜ばれることか、何が主のみこころであるかを判断しながら歩んでいた。

このようなすばらしい教会であったことを知っていました。だからこそ、次のことを正しく行なうことができたのです。

3) 互いに訓戒し合うことができる

三つ目の特徴です。「訓戒し合う」とは「注意する、諭す、たしなめる」ことです。ジョン・マッカ

サー先生は「このことばは、激励、警告する、忠告するなどの概念を持っている。それは、カウンセリングに対する包括的用語である。」とそのように言っています。つまり、言い方を変えるなら、このローマの教会は教会員の間でカウンセリングを行っていたと言うのです。なぜなら、彼らは互いに励まし合い、時には、警告や忠告を与え合っていたのです。何のために彼らはそのようなことをしていたのか？簡単です。主に喜んでいただくためにです。しかも、私たちが覚えなければいけないことは、このカウンセリングは世の中の知恵に基づいたものではないということです。なぜなら、今まで私たちが見て来たように、このローマのクリスチャンたちはみことばにしっかりと根を下ろしていたからです。そのみことばに基づいて「あなたはこのみことばの教えに反している、あなたは間違っている。」ということを書いたのです。驚くべきことは、約二千年前にこのようなことを教会の人々はやっていたのです。残念ながら、現代になればなるほど、教会の中でそのようなカウンセリングが行なわれているかどうか、教会も世の中の知恵をもらって、世の中の知恵に基づいたカウンセリングを取り入れて、神のおことばから外れてしまっているという現実気付かされます。非常に悲しいことです。

◎ローマ教会のクリスチャン

*みことばに従って歩んでいた

まとめるとこうなります。このローマの教会において、人々はみことばという神の物差しをもって人々を励まし、そのみこころから外れた時は間違っていると忠告を与えていました。ですから、当然、彼らの行っていたカウンセリングは正しかったのです。なぜなら、カウンセリングを行なっているカウンセラー自身が正しかったからです。彼らは神を愛してその神のみことばに喜んで従う者として歩んでいたのです。みことばを知りそのように生きていたのです。そういう人々が、あなたの考えていること、あなたのやっていること、あなたのことば使い、あなたの態度などについて「それは間違っている、それを改めましょう」と言い、そのようにして互いの成長を図っていたのです。自分たちの願いや思いを通そうとしたのではなく、神が喜んでくださること、そのことを心から願って彼らはこのようなことを行っていたのです。ですから、非常に驚くべき教会でした。

*パウロには彼らの霊的成長に関する確信があった

だから、ローマ1：12で、パウロはこのようなことを言っています。「というよりも、あなたがたの間にいて、あなたがたと私との互いの信仰によって、ともに励ましを受けたいのです。」、「ともに励ましを受けたい」と言います。パウロのような偉大な信仰者なら励ましを与える立場にあるはずですが、しかし、パウロは知っていたのです。このローマ教会を訪問して、このようなクリスチャンたちと時間を過ごせるなら自分が励まされるに違いないと。なぜなら、彼らはこのような歩みをしている人たちだったからです。そのことを知っていたからです。

(1) 彼らの評判

そして、驚くべきことに、このような教会だからすばらしい証がなされていました。ローマ1：8b「それは、あなたがたの信仰が全世界に言い伝えられているからです。」、どうしてこのようなことが起こったのか？それはこの教会の教会員たちが神の前を正しく歩んでいたからです。この教会が神に喜ばれる教会だったからです。パウロは15：14に「…この私は確信しています。」と記しています。私たち日本人はこのようにことばを聞くとこのように思ってしまいます。何かパウロは最後にローマの人々に対してお世辞を言ったのではないかと。ずっと厳しいことを話して来て、この辺でちょっと彼らを持ち上げるために「あなたたちのすばらしさを知っています」とお世辞を言ったのか？違います。パウロには確信があったのです。このローマのクリスチャンたちに対する確信です。

先ほど見たように、パウロはこのローマのクリスチャンたちの信仰の評判をいろいろな人々から聞いたのです。「あなたがたの信仰が全世界に言い伝えられているからです。」と、この当時の世界において中心はローマでした。ローマ帝国の中心はこのローマです。そこに教会があったのです。多くの人々がこの中心であるローマにやって来ました。そして、恐らく彼らは何らかの形でそのクリスチャンに出会ったり、教会を訪問したり、また、教会を知っている人たちと話しをしたりと、何らかの形でこの教会と接点がありました。そして、彼らが自分たちがやって来た所に戻って行って、いろいろな土産話とともにこの教会のことも様々な所で告げたのです。ローマにはすごい教会があると。そして、ローマのクリスチャンでない人たち、ローマのクリスチャンのことを知った者たちが、全世界において、つまり、ローマ帝国内においてこの教会の話をしたのです。そこにはかなりの真実性があります。人々が見て人々が証したのです。「あの教会はすごい教会だ」と。ですから、パウロは多くの人たちの証を聞いて、この確信を持っていたのです。

(2) 福音の力

もう一つ言えることは、パウロは福音の力を知っていたということです。それがローマ1：16に記されています。「私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。」と、パウロは福音には人を根底から変える力があるということを知っていました。人を生まれ変わらせる力があることを知っていました。なぜなら、彼自身がその証人だからです。「私は生まれ変わった。新しく生まれ変わった。」と、そのことをパウロ自身が体験しています。それは彼の力ではなくて神の力であることを知っていたゆえに、パウロはこのローマにいる救われたクリスチャンたちが、彼と同じように神によって変えられていることを確信していたはずで

Ⅱテサロニケ1：11に「そのためにも、私たちはいつも、あなたがたのために祈っています。どうか、私たちの神が、あなたがたをお召しにふさわしい者にし、また御力によって、善を慕うあらゆる願いと信仰の働きとを全うしてくださいますように。」とあります。「私たちの神が、あなたがたをお召しにふさわしい者に」と言うのです。パウロの確信は、神があなたを救われたら神はあなたを変えてくださるということです。救われた者にふさわしく神はあなたを変えていかれるという確信です。もし、あなたがこの救いに与っているなら、そのような主なる神の働きをあなたも経験しておられるはずで

パウロの確信はここにあったのです。ローマのクリスチャンたちは確実に救いに与っている、救いに与っている以上、神が彼らを変えていかれる、神はそのような働きをなさると、そのような確信を彼は持っていたのです。だから、彼は「私の兄弟たちよ。」と呼び掛け、「あなたがた自身が善意にあふれ、すべての知恵に満たされ、また互いに訓戒し合うことができることを、この私は確信しています。」と言うのです。

神が望んでおられる教会の姿が見えませんか？信仰者一人ひとりが神の前に何が正しいことなのか、そのことを考え、そして、正しいことを選択して歩んで行く。失敗すればそのことを悔い改めて、また、神に従って行こうとする。彼らはしっかりとその信仰を聖書において、聖書にしっかりと根を下ろして、みことばに従って生きている。ゆえに、神は彼らを変えていってくださり、彼らの信仰がどんどん成長していく。そして、そのプロセスにあって、彼らは互いが益々成長していくために、励まし合い、ときには互いに戒め合ったりしていたのです。このような教会を神はお喜びになるのです。そして、このような教会になるためには、あなたがそのように生きていくことです。もちろん、ローマの教会が完全であったとパウロが言っているのではありません。その中には信仰においてなかなか成長していない人もいたでしょう。信仰者と言いながら実は救われていない人もいたでしょう。みながみな神を心から愛して、神に喜んで従っていたかというそうではないでしょう。しかし少なくとも、その教会の中に今話したような思いを持って生きようとする者がいたのです。神はそういう人を祝して変えていかれたのです。そんな人になってください、皆さん。周りの人よりもまずあなたがそのような信仰者へと変えられていくことです。

なぜなら、あなたを救ってくださった神はあなたを変えてくださるし、また、あなたを神の目的に沿って用いてくださるからです。パウロは救われたことを感謝し、主から与えられたその働きを喜んで行ない続けました。「それが理由で私はこの手紙を記した。」と、パウロはそのようにローマのクリスチャンたちに教えるのです。主に喜ばれる信仰者としてしっかりとみことばに従い続けていくことです。このローマのクリスチャンを私たちも模範にして、彼らの歩みに倣って歩んでいくことです。信仰者の皆さん、どうぞ、その歩みを今日から始めてください。主が喜んでくださることを心から願いながら…。

《考えましょう》

1. ローマ教会が主に喜ばれていた理由を挙げてください。
2. 正しい知識を積むことは大切ですが、どうしてそれだけではだめなのでしょう？
3. 知恵に満たされた人とは、どのような人かを説明してください。
4. 互いに訓戒しあうことの大切さを説明してください。そのときの注意点も挙げてください。